

だから、「負けじ魂」でいこう

# 湿気と陰翳が育んだ日本人の精神

谷崎潤一郎が日本の文化・風土を論じた『陰翳礼讃』は、昭和八年に発表された。

この『陰翳礼讃』とともに、寺田寅彦や和辻哲郎の仕事を読み解いていくと、現代の日本人に対して発せられた、大いなる問いが見えてくるという。いまがそれを受け取り直すときだ、という山折さんに話を聞いた。

宗教学者

## 山折哲雄

●やまおり・てつお 1931年生まれ。岩手県出身。白鳳女子短大校長、京都造形芸大大学院長を経て、国際日本文化研究センター所長などを歴任。和辻哲郎文化賞、南方熊楠賞などを受賞。近著に『危機と日本人』など。

しょう。

**寺田、和辻、そして谷崎**  
三・一一によって我々は、日本人の死生観の問題を正面から突きつけられました。日本人の死生観を考へることなしに、震災からの復興、国内の政治経済や国際社会での立ち位置の問題を含めた日本の行き先は、考えられない状況にあるといえるで

しょう。こうした時代の変化がたしかに生まれつつあるのだけれど、しかし発生から二年半を経て、残念ながら多くの日本人は、三・一一のことを忘れ始めています。私自身、東北通いを続けながら、東京や関西の人々はいま、三・一一のことをどう考へているのだろうか」と心の隅で思うことがある。そして自分の人生をどう締め

くくつたらいいのかと考えるようにもなりました。いまから九十年前の関東大震災後に、日本の知識人がどのような問題意識を持ち、研究を重ね、日本という国と日本人にいかなる警告を発したのか。そのあたりのことをしっかりと検証して、問題点を描き出すことが必要ではないのか、そうも思うようになりました。

その観点に立つて振り返ると、さしあたって私には三人の先人の名前が浮かんできます。寺田寅彦と和辻哲郎、そして谷崎潤一郎です。

まず寺田寅彦ですが、彼は地震学者という専門家の立場からさまざまな卓見を残しています。とりわけ、彼の震災後の関心がより深く日本人と国家のあり方に向けられていたことがわかります。今日指摘したいのは次のことです。

一つは寺田は、日本の自然環境と、地震も台風もない西ヨーロッパの自然環境は、そもそも違うと言っていること。日本人は、太古の昔から、モンsoon日本で繰り返し発生する地震や台風と付き合う中で、「天然の無常」という感覚を育み、その感覚を五臓六腑にしみこませることになった。それを抜きに、日本の学問も科学も語ることはできないだろう

と言っています。

そこで今日、私があらためて思うのは、自然災害の中で、とりわけ地震災害が持つ基本的な特徴についてです。地震には、そもそも人間存在を根底から脅かす恐るべき力があるということ。それは確率予測はできても、その発生を予知することはできない。だから地震がいつ、どこで、どれくらいの規模で起こるか、結局われわれにはわからない。勢い、時間の経過によってその不安から逃れようとする。つまり忘れるしかない。

たとえば三・一一の直後は、東京直下型地震の被害予測が大きく報道されて日本中が浮足立っていました。でも、いまはもうそのことを忘れていく。南海トラフ地震の予想にしても、被害想定が発表されたときには誰もが危機的な不安に直面したはず

です。しかし、その不安を抱いたままでは、人は生活していくことができません。それで、いつの間にかこれも忘れていく。人間はこの繰り返しで生きてきたのではないのでしょうか。

地震はそもそも予知することができない。そして、それがひとたび発生すると、人々はどこへ逃げているのかわからない。隣にいる人間が死んで、自分が生き残るかもしれない。逆に、自分は死んで、隣の人間が生き残るかもしれない。

そういう一種運命的な災害というのは、人間を宗教的たらしめる本質を持っていきます。洪水や竜巻など、地上で起こりうる災害はさまざまありますが、地震というものは、最も本質的に宗教的契機をはらんだ災害だと私は考えているんです。

その地震と千年、二千年、一万年